

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(3)

——1930年代——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1号および第4巻第2号において、それぞれ、19世紀末から1910年代にかけて、および、1920年代に、発表された個々の研究の内容を整理する試みをなした。本稿はそのつづきであり、1930年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する個々の研究の内容を整理しようとするものである*。

(1) D. ローゼンベルグ (1934)

まず、ローゼンベルグによれば、スミスは、分業がいかに自然的に発生し、交換が発達し、貨幣が発生したかを研究したのち、交換はいかに自然的に発達するかそれを決定する法則はいかなるものであるかということについての研究へと進み、「人々が、財貨を貨幣と交換するか、または財貨を相互に交換する」にあたって自然的にまもる諸法則を明らかにすること

* 諸研究の発表年度の区分は、原則として、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、論文の場合には、それが最初に書物あるいは雑誌に掲載された年度に、したがった。ただし、本稿で使用した文献は、必ずしも原版、初版のものではない。

へと向かうことによって、交換価値の研究へといたり、そして、スミスのこの交換価値論の任務は、(1)諸商品の真実価格を決定し、(2)この真実価格がいかなる部分から構成されているかを示し、(3)市場価格と真実価格との一致を妨げる原因を究明する、という三つの任務に分かれ、その各々に、それぞれ、『国富論』第1篇の第5章、第6章、第7章があてられている、とされ、¹⁾そして、ローゼンベルグは、その各々の任務にたいするスミスの議論を検討する（特に前の方の二つの任務について）のであるが、その脈絡のなかで、つぎのような諸点を示している。

①ペティ以来、つまりスミス以前から、自然価格と市場価格とはすでに区別され、さらに、自然価格は労働によって決定される、と考えられていた。スミスはそれに加えて、フランクリンと同様に、諸商品の交換価値を、諸商品の価格（諸商品の交換価値の貨幣形態）から抽象している。²⁾なおその場合、彼の一般的概念、とりわけ、貨幣は一方では流通要具であるが他方では商品であるとする彼の貨幣論が大きな影響を与えているのであるが、この貨幣論からは、交換価値を価格から抽象する必要だけでなく、価格の交換価値への還元が生ずる。³⁾ところで、ペティもスミスともに、商品の交換価値または自然価格を労働によって決定しているのであるが、ペティでは、労働は商品と貨幣との量的割合を決定する尺度であったのにたいし、スミスでは、労働は商品と商品との量的割合を決定する尺度であった。⁴⁾ところが、スミスは労働によるこの商品の交換価値の規定において、商品によって「購買しうる労働」と商品の生産に「費やされる労働」とを絶えず混同し、両者を同一のものと考えるといった混乱におちいっている。⁵⁾この混同は、彼の全概念、とりわけ分業論から起っているのであるが、⁶⁾さらに、この「支出された労働」と「購買されうる労働」との同一視は、これによって労働を価値の外面的尺度とも内面的尺度ともみなすことができる、という事情から生じたものでもあり、スミスはここにおいて、価値の実体をなし価値を規制し価値を内面的に較量しうる価値の尺度という意味での価値の内面的尺度と、貨幣が価値の尺度であるという意味での価値

の尺度つまり価値の外面的尺度とを、混同しているのである。⁷⁾

②他方スミスは、彼の第二の任務として、諸商品の価格の構成部分を問題にするのであるが、価格は労働によって決定されるというのに、この価格の構成部分とは何を指すのであろうか、また、この問題の提起そのものがすでに労働価値説の拒否を含んでいるのではないであらうか。この意味で、この問題の提起そのものが不明なもののようにみえるのである。⁸⁾そしてまた事実、スミスはここでは、形式的には諸商品の交換価値の問題をつづけているのではあるが、実際上は、その問題から分配の問題に飛躍しているであり、そしてこの飛躍のゆえにスミスは諸商品の交換価値の問題を混乱させることとなり、ついに彼は、価値法則は「原始的状态」においてのみつまり資本および土地私有がまだ存在しなかった時代にのみ支配していたのだ、という結論に達せざるをえなかったのであった。かくしていまや、収入が「諸商品の交換価値を規制する内在的尺度」となり、労働はたんに価値の外面的尺度という役割を果たすにすぎない、ということになる。⁹⁾このように価値の問題から分配の問題に飛躍したスミスは、労働価値説を放棄し、諸商品の交換価値は収入によって決定されるという新説をたてることを余儀なくされたのであり、そしてこの新説は、生産費説(スミスは、その生産費のなかには資本の利潤を含むあらゆる収入が含まれると説明している)¹⁰⁾なのであった。¹¹⁾

1) D. ローゼンベルグ著、直井武夫訳『経済学史』(第1巻)、ナウカ社、1935年(ロシア語原本の出版は1934年)、310—314ページ。なお、ローゼンベルグによれば、商品の交換価値の研究においてスミスの関心をひくものは、労働の生産物の形態としての商品、および、商品の要因としての交換価値(正確には、価値)ではなく、スミスはこれらを自然的現象とみなしていたのであり、スミスが説明することを欲しかったことは、たんに、一商品と他の商品との交換すなわち両者の交換価値を決定するものはどのような法則(スミスはこれを自然的なものと考えている)であるか、ということであった、とされる。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、311ページ。)

また、ローゼンベルグは、スミスの研究対象としての「交換価値」概念そのものについてつぎのような指摘をなしている。それによれば、スミスにしたがえば(1)商品の交換価値とは、「他の商品を購入する力」である、(2)しかしこの力は「その対

象物の所有」に附随しているものであり、この力は、いわばある特権もしくは権利から生ずるのではなく、一定の対象物の所有から生ずるものである、したがってそれは、いわば対象物そのもののなかに潜みその属性をなすものであった。だがそれにもかかわらず、スミスにとっては、使用価値が商品の要因でないのと同じように、交換価値は商品の要因ではないのであった。（D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、311—312ページ。）

さらにまたローゼンベルグは、スミスが彼の研究対象としてうえにみたような意味での「交換価値」を選び、そしてそれを「使用価値」と区別したことに関連して、大旨つぎのような指摘をなしている。それによれば、商品が労働生産物の歴史上特定の形態であることを理解しないスミスは、商品が対立物の統一、相互に排除しつつ相互に前提しあう要因の統一であることを理解しなかったものであり、彼はたんに、物の直接の効用と、物の所有から他の物を購買する力が生ずることを、区別したにすぎなかった。この区別に対応するものが、スミスによる、使用価値と交換価値との区別であり、彼は、これら両者の統一を理解しなかったのである。なお、水とダイヤモンドの価値のパラドックスで示されている交換価値は使用価値に依存しないという彼の命題は、まったく正しいのであり〔ただしスミスは、人間の自然的欲望を充たす物だけが有用で（すなわち使用価値をもち）、そうでないものは有用でない（すなわち使用価値をもたない）としているという意味で、効用（使用価値）を合理主義的に取り扱っているのであるが、それは誤りであり、その欲望が自然的なものから生じたもの（たとえば胃袋から生じたもの）であるかそれとも幻想から生じたものであるかという欲望の性質には関係なしに、欲望の対象となるものは使用価値をもつのではあるが。〕、また、スミスが関心を抱いていたのはたんに交換価値を決定する諸法則だけであるから、彼が交換価値のみを研究し、これらの諸法則に影響しない使用価値が彼の視野から脱落していたということは、すこぶる当然である。だが、スミスがこのような形で交換価値を使用価値から切り離していることは、彼が両者の区別のみを見てその統一に気づいていないこと、すなわちまさに彼が商品経済の研究の土台の上に立っていないことを示してもいるのである。（D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、311—313ページ。なお、前稿でみたように、ローゼンベルグは、スミスが使用価値を研究の範囲外におき交換価値のみを研究していることをI. I. ルービンはスミスの成功とみなしているとし、それにたいしていまみたような視点から批判をなすのであった。それについては、D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、313—314ページ、拙稿『『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究＜2＞——1920年代——』『広島経済大学経済研究論集』第4巻第2号、1981年7月、注17を見よ。）

- 2) なお、ローゼンベルグによれば、ペティは、その重商主義的見解に災されて、交換価値を、価格からつまり交換価値の貨幣形態から、抽象することができなかった、

とされる。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、315ページ。)

- 3) その間の事情をローゼンベルグはつぎのように説明している。すなわち、もし実際に貨幣は普通の商品にすぎないとすれば、 $W-G$ および $G-W$ は、商品と商品との交換にはかならない、換言すれば、売買と直接の商品交換との区別は消滅してしまう。他方、貨幣を流通要具にのみ還元しても同じような結果に到達する。なるほどこの見地からすれば、 $W-G$ および $G-W$ は別々に見るならば商品と商品の交換行為ではない、すなわち、 $W-G$ においては、商品と引換えにたんに流通要具つまり商品を得る要具が得られ、 $G-W$ においては、すでに得られた流通要具と引換えに商品が得られる。しかし貨幣がたんに流通要具に還元されるとすれば、 $W-G$ および $G-W$ の行為の特殊性は消滅する。すなわち、初めの行為においては価値が商品形態から貨幣形態に転化し、あとの行為においては価値が貨幣形態から商品形態に転化するということが、消滅してしまう。注意は得られた結果にのみ注がれ、全変態は $W-W$ に還元される。このようにスミスの貨幣論は内的には矛盾していないのであり、そしてそれからは、(1)すべての売買行為は、すでに、商品と商品との交換である、(2)全変態はたんに、商品と商品との交換である、という結論が生まれる。だからスミスは、あるときには交換価値を価格（自然価格）とよび、またあるときには反対に、価格を交換価値とよんでいるのである。したがって、重商主義に影響されたベティが交換価値を価格に還元したとすれば、反対に重商主義と戦ったスミスは価格を交換価値に還元しているのである。ベティにとっては、金銀に具体化されなければ交換価値というものには存在しないが、スミスはこの具体化にはなんらの意義をも認めない。ベティは金銀と商品との関係を決定する諸法則を求めているのにたいし、スミスは商品と商品の関係を決定する諸法則を求めている。ベティは貨幣において商品の価値が表現され実現されるにすぎないということを理解しないが、スミスは商品の価値は貨幣においてのみ表現され実現されるということを理解しない。一言でいえば、ベティが諸商品の交換価値を云々する場合、彼はこれを自然価格の意味に解し、スミスが諸商品の自然価格を云々する場合、彼はこれを交換価値の意味に解しているのである。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、315—316ページ。)

- 4) D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、316ページ。なおローゼンベルグは、ここにスミスとベティとの継承関係がある、とし、そして、ベティは労働価値説の端を開いたのであるがスミスはこれを継続し、これを彼の他の理論と結合し整然とした体系を樹立しようと試みているが他面でスミスは労働価値説を展開するにあたって新たな困難に当面し、混乱におちいりそして労働価値説を発達した資本主義経済に適用することを拒んでいる——この点ではスミスはベティ（フランクリンは言うまでもなく）よりも一歩退却している——が、それでも彼は、労働価値説を著しく前進させた、としている。したがってまたローゼンベルグによれば、俗流化に墮さないで

スミスの経済学説を真実に継承する後世の理論家は、スミスにおいて切れている理論の糸を継続しなければならなかった、すなわち、まず第一に、スミスの出発点を批判的に検討し、彼の不徹底を発見し、中味を殻から分離しなければならなかった、また第二に、スミスの労働価値説は彼の一般経済理論から、なによりもまず彼の出発点である分業論から展開されているのであって、労働が交換価値の尺度であることを拒むのは彼の経済論全体の精神に矛盾していたのであるから(スミスは、一方でこの尺度を正しく理解しなかったゆえに、他方で克服しえない困難に出合ったがゆえに、このような矛盾をあえてせざるをえなかった)、スミスの労働価値説を放棄せず、反対にこの理論を救い、それによってスミスの学説を完成しなければならなかった、とされる。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、316—317ページ。)

- 5) この間の事情をローゼンベルグはつぎのように説明している。それによれば、スミスは一方で、各人は「自分が支配できる労働の量、または他人から購買できる労働の量におうじて、富んだり貧しかったりするにちがいない」ということを指摘し、さらにつづけて、「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる他人の労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」と述べ(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited.....by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, 1937,——以下、W. N. と略記する——p. 30. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年,<I>——以下、大河内訳<I>と略記する。ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——52ページ。), 商品の交換価値を決定するものはその商品によって購買しうる労働である、としている。ところが他方でスミスはそれに加えて、「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」と述べ(W. N., p. 30. 大河内訳<I>52ページ。), 商品の交換価値を決定するものは商品を得るために必要とされる労苦である、としている。そしてまたスミスは、商品によって購買される労働と、商品のために費やされる労働とを絶えず混同しており、彼は両者を同一のものであると考えているのであり、つぎの引用文ではこのことが明瞭に現われている。「労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の価格 (the first price), 本来の購買貨幣 (the original purchase-money) であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(W. N., pp. 30-31. 大河内訳<I>53ページ。) スミスは支出された労働——労働こそは「最初の価

格」であり「本来の購買貨幣」であった——から始めているが、「それ〔商品——ローゼンベルグ〕で購買または支配できる」労働をもって終っているのである。

(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、317—318ページ。)

- 6) その間の事情をローゼンベルグはつぎのように説明している。それによれば、スミスは社会を分業に立脚する団体、その成員が互いに各自の労働を交換しあう団体としてとらえる。そして、商品は労働生産物の歴史上特定の社会形態であることを理解しない彼は、商品と商品の交換を、労働と労働との交換に還元している。ここから彼の労働価値説が生まれる。すなわち、商品と商品との交換は労働と労働との交換にほかならないとすれば、その交換はそれに対応する労働支出にしたがって行なわれなければならない、というのである。そしてまたここにスミスは、「生きた労働」と、「対象化された労働」すなわち労働の生産物とを、同一視するにいたる。商品交換においては人と人との関係は対象化されて、物と物との関係として現われるのであるが、スミスはこれを看過しているのである。そしてスミスは、「生きた労働」と「対象化された労働」とを同一視した結果、さらにまた、「支出された労働」と「購買されうる労働」とを混同するにいたった。ところがこの混同は、資本主義的生産様式のもとでは労働力（スミスによれば労働）も労働生産物と同様に商品であるという事実によって、いっそう看破し難いものとなっているのであり、商品一般の本質を理解しないスミスは、特殊な・特別な商品たる労働の本質をも理解することができなかった。かくしてスミスにおいては、商品の交換価値は、その生産に支出された労働によっても、その商品によって購買されうる労働によっても、同じように計量される、という結論が生れたのである。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、318—319ページ。)

- 7) このことに関してローゼンベルグはつぎのような説明をしている。それによれば、スミスの議論では事実上、「支出された労働」はいっさいの商品を一定の労働量として内面的に較量できるものにし、「購買されうる労働」は諸商品の外面的尺度である（貨幣がこの尺度であるのと同様に）、とされているのであるが、これもまた、スミスの一般的概念および一般的方法論から生じている。すなわち、スミスは古典経済学全体と同じく、価値を、交換価値すなわちその形態から、区別しなかったがゆえに、価値の内面的尺度を、その外面的尺度から、区別しなかったのであり、したがって、価値の内面的尺度たる労働はまた、その外面的尺度たらざるをえなかったのである。そして、「支出された労働」と「購買されうる労働」との同一視は、あたかもこの必要に応ずるものであったのである。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、319ページ。)

またローゼンベルグは、「アダム・スミスについていま論じてきたばかりの諸点に、なおつけ加えておくべきことは、価値の規定において彼が動揺しているところに、——労賃に関する明白な矛盾のほかに——、さらに、次のような〔概念の〕混

同がつけ加わっているということである。すなわち、価値の尺度のもとで、内在的尺度——同時に価値の実体を形成するもの——が、貨幣は価値の尺度だという意味における価値の尺度と混同されているということである。その場合、後者については、他の諸商品にたいし不変の度量者として役立つところの不変の価値をもった一商品を見いだそうとする試み——円積法「不可能なこと」——がなされている。」というマルクスの言説（K. マルクス著、大内兵衛・細川嘉六監訳『剰余価値学説史』＜マルクス＝エンゲルス全集、第26巻＞第1分冊、大月書店、＜1969年＞第14刷1978年、158ページ。）に関連して、つぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスは彼の階級的立場のために、商品、価値、貨幣を歴史的に制約された形態として理解することができず、これらのことは彼の研究の視野に入らず、彼の興味はただ交換価値の内容にのみ限られていた。そしてスミスはその交換価値の内容を労働に還元するのであった。そうだとすれば、労働はつねに一定量の価値を創造するわけである。ところで、労働はたんに価値の内面的尺度であるのみならず、外面的尺度でもあるというのであるから、価値尺度として労働に代わるあらゆる商品（スミスが指摘しているように実際においてはつねにこのような代位が存する）は、労働と同じくその価値において不変なものでなければならない、換言すれば、つねに同一の労働量を代表するものでなければならない。しかしながらこれは、マルクスの表現をもってすれば、不可能なことに属するのである。（D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、319—320ページ。なお、ローゼンベルグは以上の議論の脈絡のなかで、スミスにおける「支出された労働」と「購買されうる労働」との同一視の原因をI. I. ルービンはスミスが一方では価値の変化の原因を発見しようとし他方では価値の不変の尺度を見出そうと努めていること、価値の実質的変化の理論的研究と最良の価値尺度を見出そうとする実際の任務とを混同しているということに求め、そしてルービンはここにスミス価値論の批判の基礎を置き、スミスの不幸は彼が実際の動機と理論的動機との双方によって導かれている点にあるとしている、と捉え、そのようなものとしてのルービンの見解にたいして批判をなしている。それについては、D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、319—320ページ、また、前掲拙稿、注18も見よ。）

なお、以上①でみてきたことが、ローゼンベルグがスミスの交換価値論の三つの任務としてあげたもののうちの第一の任務についてのスミスの議論にたいするローゼンベルグの検討の要旨である。

8) D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、320—321ページ。

9) この間の事情をローゼンベルグはつぎのように説明している。それによれば、スミスは、労働（生きた）は労働の生産物と同様に商品であると考えたのであるが、この特殊な商品の特殊性はスミスの視野には入っていなかった。しかしスミスは、賃労働の使用は諸商品の実現された交換価値の分配に変化をもたらすということを知っていた。すなわち、この交換価値は、もはや、商品の生産者の手元にそのまま

残っているのではなく、種々の部分に分割されなければならないのである。そしてスミスによれば、これらの部分は、結局、種々の収入に還元されるのであった。そこからスミスは、諸商品の交換価値はもはやその生産のために支出された労働を表現するのではなく、それが分割される諸収入を表現するのである、と結論するのであった。このような思想行程を経て、スミスは事実上、諸商品の交換価値の問題から分配の問題に飛躍し、その飛躍のためにスミスは諸商品の交換価値の問題を混乱させるのであった。〔なお、ローゼンベルグは、この脈絡において、マルクスのつぎのような文章を引用している。「他面、不思議なのは、A. スミスが、彼の疑念は商品相互の交換を規制する法則とは少しも関係がないということ、理解していないことである。商品AとBとがそれに含まれている労働時間に比例して交換されるということは、AまたはBの生産者たちが生産物AとBとを、というよりもむしろそれらの価値を、お互いに分配しあう関係によつては、けつして妨げられない。Aの一部分が土地所有者の、他の一部分が資本家の、第三の部分が労働者のものとなる場合、その割合はどうであろうと、そのことは、AそのものがBとその価値に従って交換されることを少しも変えはしない。商品AとBとに含まれている労働時間の比率は、AとBとに含まれている労働時間がいろいろな人によってどのように取得されるかによつては、けつして影響されない。」(K. マルクス著、前掲訳書、54ページ)。「しかし、資本家と労働者とのあいだでの生産物の価値の『分配』そのものは、諸商品の——商品と労働力との——あいだの交換を基礎としているのだから、A. スミスがびっくりして立ち止まったのは当然である。」(K. マルクス著、前掲訳書、55ページ)〕スミスが分配の問題に飛躍したのは、結局のところ、彼が事実上、売られるものは「労働」ではなく「労働力」であるということ想起したためであるが、彼は、諸商品の交換の分析から商品（資本）と労働との交換の分析に移るや、突如、彼の見地からは解決しがたい矛盾に直面した。すなわち、諸商品の交換価値は資本家の購買した労働によって創造されるものだとするれば、この交換価値が種々の階級間に分配されるということはどうして説明されるのか。交換価値はすべて労働者に属すべきものではないのか。そのような分配は価値法則の破壊である。かくしてスミスは、価値法則は「原始状態」においてのみ、つまり、資本および土地私有がまだ存在しなかった時代にのみ支配していたのだ、という結論に達せざるをえなかった。すなわち、スミスはその一般的概念からして労働価値説に到達した、しかし、商品一般の性質とりわけ特殊な商品たる労働の性質を理解せず、いかなる交換においても労働と労働との交換が行われると考えたスミスは、価値法則と分配法則とを衝突させた。価値法則によれば、労働者に彼の労働の全生産物（もしくは全交換価値）が帰属しなければならない。分配法則によれば、労働者にはたんに彼の労働の生産物の一部分が帰属するのみである。ところが、この分配法則は、資本と土地私有の出現をもってはじめて現われる、そうであるがゆえに、この両者

の出現とともに、価値法則は破られる、とスミスは結論したのである。〔ローゼンベルグは、この脈絡において、マルクスのつぎのような文章を引用している。〕「ところで、A. スミスは、まったく正当に商品および商品交換から出発しており、したがって生産者たちは、最初は、ただ商品所有者、商品販売者および商品購買者としてのみ相対しているから、スミスは、資本と賃労働との——対象化された労働と生きている労働との——交換では、一般的法則が直ちに廃棄されて、諸商品(というのは労働もそれが売買されるかぎりでは商品であるから)はそれらが表わす労働量に比例して交換されない、ということを見出す(と彼には思われる)。それゆえ、彼は、労働条件が土地所有と資本との形態で賃労働者と対立するようになれば、もはや労働時間は、諸商品の交換価値を規制する内在的尺度ではなくなる、と結論する。」(K. マルクス著、前掲訳書、52—53ページ。)(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、320—323ページ。)

10) D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、323ページ。ローゼンベルグによれば、このことからスミスは救うことのできない理論的困難におちいった、とされる。ローゼンベルグは、その理論的困難としてつぎの4点をあげている。

①第一に、収入は、価値(新たに創造された価値は実際は $V+m$ に分割される)から派生した要因から、第一次的要因に、すなわち、価値を決定する要因に、転化した。

②第二に、スミスにおいては不変資本が消滅してしまった。すなわち、彼は、新たに生産された価値だけでなく労働生産物全体の価値をも $V+m$ に分割する。というのは、彼が証明に努めているように、不変資本も究極において収入に還元され、したがって彼においては、収入と資本との区別が事実上消滅するからである。

③第三に、労働は依然として価値の外面的尺度であるという筋道のたたない主張は、いやがうえにも支離滅裂となる。すなわち、以前にはスミスは価値の外面的尺度と内面的尺度とを区別しなかったのであるから(価値と価値形態とを区別しなかったように)、上の主張はなんとか筋道がとおっていた、だが、労働が価値の内面的尺度でなくなったとすれば、もはやそれが外面的尺度であることを主張する根拠はないのである。

④最後に、ある商品によって購買されうる労働の量は賃賃の変動に応じて変化するのであるから、「購買されうる労働」は、もはや、価値の尺度ではありえない。なお、スミスを主として悩ましたのはこの最後の事情であった。というのは、それは事実上、労働価値説をくつがえしているからである。そこでスミスは、変化するのは「労働の価値」ではなく商品の価値であって、その結果当該商品によって購買しうる労働はある時には多くなりある時には少なくなるということを、証明しようと努める。そしてスミスは、この命題の証明において主観論におちいっており(なお、ローゼンベルグによれば、このことが、近代の俗流経済学者がスミスを主観的

価値説の理論家にかぞえる理由となっている、とされる)、つぎのように言っている。すなわち、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、〔その——直井〕労働者にとってはつねに等しい価値である、ということができよう。健康、体力、精神が普通の状態、また熟練と技能が通常程度であれば、彼は、等量の労働にたいしてはつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一量を犠牲にしなければならない。彼が支払う価格は、それと引換えに受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。」(W. N., p. 33. 大河内訳<I>57ページ。)(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、323—324ページ。)

- 11) D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、324ページ。なお、ローゼンベルグによれば、スミスは、生産費に一致する価格を自然価格と名づけ、それ以上のまたはそれ以下の価格を市場価格もしくは現実価格とよんでおり、かくしてスミスはその価値説によって解決すべき第三の任務——諸商品の自然価格および市場価格の問題——に近づく、とされる。そしてまたローゼンベルグによれば、スミスの研究は、以上のように、労働から収入へ行き、収入から生産費に行っており、またその間に、彼の労働価値説は、労働時間による価値の決定に基づく科学的学説から生産費による価格の決定に立脚する俗流的学説に転化しているという意味で、根本的に変化しているとともに、彼の研究方法も、最初は主として内面的方法であったが(というのはスミスはブルジョア社会の生理学に透入しようと努めたからである)、最後にはほとんどもっぱら外面的方法になっていた(というのはスミスの全研究は、事物の表面において、流通において、競争においておこる事柄の観察に、止まったからである)という意味で、変化している、とされる。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、324—325ページ。)

なお、ローゼンベルグは、スミスの研究のこの部分(スミスの第三の任務に関する部分)で注意すべき点として、スミスは商品の需要供給における変化、および、市場価格をして自然価格の周囲を変動させもしくは彼のいうように市場価格を自然価格にひきつけるところの競争の機構を、かなり詳細に観察している、ということをあげている。(D. ローゼンベルグ著、前掲訳書、325ページ。)

(2) M. ボウレイ (1937)

他方、ボウレイは、1937年の著書では、つぎのような見方を示している。

①スミス自身の価値および分配についての理論は、一部分は生産を消費者需要に結びつけるメカニズムの説明ということに、また一部分はなんらかの種類の指数によって富の進歩を測定する方法を発見することに向けら

れた諸示唆の合成物にすぎない。¹²⁾

②『国富論』での価値についての三つの章(第1篇第5, 第6, 第7章)には, 三つの論理的に別個な考えが存在しているのであるが, そのうちの一つは, 不変の価値尺度を発見しようということであった。¹³⁾

③スミスは, 土地と資本を考慮に入れるとき, 「支配される労働量」を保持しつつ「使用された労働量」を放棄したのであるが, 価値の尺度として労働を使用するということは, 『国富論』全体をつうじて残存した。¹⁴⁾

④スミスは『国富論』では, 未開社会での価値の決定については労働の実際の不効用ということにもとづいて労働価値説を適用するのであるが, 土地と資本を考慮に入れなければならない社会状態について価値尺度として「支配される労働」が保持されているということは, 労働することによって引きおこされる犠牲の不変性ということについてのスミスの主張と矛盾するものではなかった。¹⁵⁾

12) M. Bowley, *Nassau Senior and Classical Economics*, (originally published 1937, by George Allen & Unwin Ltd.,) reprinted, Octagon Books, Inc., 1967, pp. 67-68. なお, ボウレイによれば, 前々稿(「『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究<1>——19世紀末から1910年代まで——」『広島経済大学経済研究論集』第4巻第1号, 1981年4月)でみた1903年のC. M. ウォールシュの所論では, 総国富 (total national wealth) の変化を測定するための標準を発見しようというスミスの意図が, 十分に強調されていないように思える, とされる。M. Bowley, *ibid.*, p. 69 n. 3.

13) M. Bowley, *ibid.*, p. 68.

14) M. Bowley, *ibid.*, p. 70. なお, ボウレイによれば, このことは十分に論理的であった, とされる。そしてその理由は, 労働価値説が適用された「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」という未開社会においては, 価値の, 決定因, 尺度および源泉はすべて一致していたのであり, そして, 「ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量は, その商品がふつう購買し, またこれと交換されるべき労働の量を左右できる唯一の事情である。」(W. N., pp. 47-48. 大河内訳<1>82ページ。)と正当に言われたからである, とされる。M. Bowley, *ibid.*, p. 70.

15) M. Bowley, *ibid.*, p. 69.

16) M. Bowley, *ibid.*, p. 70. なお、ボウレイは、「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によってはかられる、ということである。労働は、価格のなかの労働に分れる部分の価値だけでなく、地代に分れる部分の価値、および利潤に分れる部分の価値をもはかるのである。」(W.N., p. 50. 大河内訳< I >85ページ。)という文章をとりあげ、この結論は、実際には、価値理論とは別個のものであり、リカードウがたんなる混乱の結果と考えたようなものではなく、あとのほうで価値尺度として穀物が導入されたのと同じように、それは、不変の標準によって富を測定しようという試みにすぎない、としている。M. Bowley, *ibid.*, pp. 70-71.

なお、以上でみてきたボウレイの諸言説からして、ボウレイは、スミスの議論では、価値尺度は一貫して「支配される労働量」であったのであり、ただ未開社会では、それはそのような社会での価値の原因、決定因としての「使用された労働量」と一致したのだとされている、とみていると言うこともできよう。

また、ここではボウレイは、価値尺度に関するスミスの議論では「穀物」は、ひとつの価値尺度であるということ自体については、いわば「労働」と同格の地位を占めるものとして取り扱われている、とみていると言うこともできよう。

(3) E. ロール (1938)

いっぽう、ロールは、スミスは『国富論』においてある特定の事物の効用をあらわすものとしての「使用価値」と事物がもっている他の財貨を購買する力としての「交換価値」とを区別しそしてそれらのうちの「交換価値」の分析にすすむ、とするのであるが、¹⁷⁾『国富論』における交換価値の尺度に関するスミスの議論についてつぎのような見方を示している。¹⁸⁾

①『国富論』第1篇第5章における交換価値の説明は、分業と私的交換という社会的事実から生じる交換価値の質の分析から始まるのであるが、スミスはこの分析をつうじて、商品の交換価値は、その商品が支配しうる労働の量に等しくなり、この意味で労働こそが「すべての商品の交換価値の真の尺度である」と結論する。¹⁹⁾

②ところがこれにすぐつづいて、価値と、その尺度との起源についてのもう一つの説明が現われ、そこでは、商品の価値は、その商品の生産に要する労働の量によっても測定される、とされている。²⁰⁾

③「一定量の商品で購買，支配しうる労働の量，あるいは，一定量の労働で購買しうる商品の量」（労働の価値）と「商品の生産に要する労働の量，商品に体化されている労働の量」とはまったく別のものであるにもかかわらず，スミスは後者は前者を言い換えたにすぎないつもりでいたのであり，これら二つの交換価値の尺度は，スミスの議論において混乱した形で併行して存続していく。²¹⁾

④以上においてスミスが価値尺度としての労働について語る場合，そこでは，労働は，交換価値に固有のものという意味で使われているのであるが，それにつづいてスミスは，事実上，交換価値に固有なものという意味ではなくて，それでもって諸商品の価値を比較する一つの物差しといった意味での，価値尺度としての労働について，またそれに関連しての貨幣その他のそれに附随する諸問題を論じている。そのさい，スミスは，「価値尺度」という言葉の正確な意義について混乱していたため，ここにおいて，貨幣を労働と同等の地位に仕立てあげている，あるいはほとんどそうしている。²²⁾

⑤第1篇第6章において，スミスは，第5章にみられるような商品の交換価値の「投下労働量」による規定は労働者が労働の全生産物を所有するストック「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」すなわち前資本主義時代においてのみ妥当するとし（一定量の商品が購買しうる労働の量と一商品に体化された労働の量という交換価値についての二つの考え方，混乱のゆえに，彼は，労働価値説の妥当性を，このようなものに限定せざるをえなかった），そして，資本主義的生産の諸条件のもとにある社会に関しては，スミスの問題のとらえ方からすれば価値の唯一の源泉，価値の固有の尺度を労働に求めることが困難となり，事実上，新たな価値論，初期的な生産費説へと向かうのであるが，ここでもなおスミスは，価格の各構成部分（賃金，利潤，地代）の真実価値はそれが支配しうる労働量に等しいと主張してはいる。²³⁾

- 17) なお、ロールによれば、スミスが貨幣に関する章(『国富論』第1篇第4章)の末尾で、「価値」という言葉の二つの意味を区別したのは、真に重大な作業たる交換価値の分析に入るまえに、邪魔物を取り除いておくためであったように思える、とされる。E. Roll, *A History of Economic Thought*, (1st ed., 1938, 2nd ed., 1945, 3rd ed., 1956) Kinokuniya Asian edition, 1975, p. 156. 隅谷三喜男訳『経済学説史』(上, 下)(第2版の訳), 有斐閣, (初版1951年)再版第5刷1970年, <上>199ページ。
- 18) なお、ロールによれば、スミスはすでに『グラスゴー大学講義』における交換価値についての議論において、労働を価値の唯一の源泉とみなし、各商品に体化された労働の量をその商品価値の尺度とみなしていた、というふうに言われるかもしれないが、そこにおいてすでに混乱が始まっている、とされる。それについては、E. Roll, *ibid.*, pp. 157-158. 邦訳<上>201ページを見よ。
- 19) この間のスミスの推論をロールはつぎのようなものとして示している。すなわち、スミスによれば、人の貧富はその人が獲得しうる有用物の量にしたがって決まる。しかし分業が行なわれるようになると、彼自身の労働が彼にもたらすのはこれらの事物のごく小部分にすぎなくなり、彼の富は、彼が支配しうる他人の労働の量に依存することとなる。かくして、彼の所有するなんらかの商品の交換価値は、それが支配しうる労働の量に等しくなる。スミスはここから、労働こそがすべての商品の交換価値の真の尺度であると結論した。E. Roll, *ibid.*, p. 158. 邦訳<上>202ページ。
- 20) E. Roll, *ibid.*, p. 158. 邦訳<上>202ページ。
- 21) E. Roll, *ibid.*, pp. 158-159, 161. 邦訳<上>202-203ページ, 206ページ。なお、ロールによれば、スミスのこの混乱の原因は、分業の重要性和分業の導入がもたらす諸変化を強調したいという彼の欲求のなかに存する、とされる。すなわち、スミスにしたがえば「労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の価格……であった」(W.N., p. 30. 大河内訳<Ⅰ>53ページ。)のであるが、ひとたび分業が導入されると、富(wealth)を決定するものは、もはやその人自身の労働の生産物ではなく、この生産物が支配しうる他の人々の労働の量すなわち人が、その人の生産物のなかに含有されている労働量をもって購買することのできる労働一般の量であるということとなる。換言すれば、スミスがここでなしつつあったことは、交換価値それ自体の概念、すなわち労働価値説に関するかぎりでは労働が一個の社会的な因子(a social factor)となったときにはじめて生じるところの交換価値の概念を、明らかにしようということであった。というのは、分業と交換が起ったことによって、異なる諸個人の労働の諸生産物は、なんとかして、均等化されなければならないからである。ところがスミスはこの概念を、労働の諸生産物の均等化だけでなく、労働生産物と労働自体との間の均等化をも含むような方法で、適用して

しまった、というのである。(そしてまたロールによれば、スミスをしてついに異なった価値論を展開させるにいたった困難性はここに根差していたのである、とされる。) E. Roll, *ibid.*, p. 159. 邦訳<上>203ページ。

- 22) E. Roll, *ibid.*, pp. 159-160. 邦訳<上>203-204ページ。なお、ローゼンベルグによる、スミスの議論における価値の内的尺度と外面的尺度に関する指摘はすでにみたところであり、そしてロールも、いまみたように、スミスの議論には、事実上、交換価値に固有のものといった意味での価値尺度と、それでもって諸商品の価値を比較する物差しといった意味での価値尺度という二つの考えが含まれているとしているわけであるが、R. L. ミークは、その初版が1956年に出された彼の著書において、「価値尺度」という言葉そのものについてつぎのような指摘をしている。すなわち、「価値の尺度」という言葉は、つぎの二つのことのいずれをも(あるいは多分その両方を)意味しうるものであり、その一つは、一フット物差しが長さの尺度であり、ぜんまい秤が重さの尺度であるのと同じ意味での「尺度」、もう一つは、価値のまさに内容あるいは実体を測定するだけでなくある意味で価値のその内容または実体を体现するところの、一種の内在的「尺度」を意味するものとしての「価値尺度」、ということである、としている。(R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value* <1st ed., 1956> 2nd ed., Unwin Brothers Limited, 1973, p. 51. 水田洋, 宮本義男訳『労働価値論史研究』<初版の訳>, 日本評論新社, 1957年, 53-54ページ。)

なお、ロールは、さきにみた二つの価値尺度の意味の相違を認識していなかったという意味でスミスは「価値尺度」という言葉の正確な意義について混乱していた、とみているといえるのであるが、ロールは、後者の意味での「価値尺度」という脈絡においてもスミスは最終的には労働を真の尺度とした、とし、その間の事情をつぎのように説明している。それによれば、この後者の意味での「価値尺度」という脈絡においては労働は有効な尺度でないということをスミスは知っていた。すなわち、スミスによれば、諸商品が労働と交換されることはめったになく、他の諸商品と交換される、それゆえ、諸商品の交換価値は、「抽象的な観念」である労働のタームでよりも、「目に見え、手でさわれる」物体である他の商品の量のタームで評価されるほうがより普通である。しかしながらひとたび貨幣が使用されるようになると、すべての商品は最もしばしば貨幣と交換されるようになり、貨幣が一般に用いられる価値尺度となる、とされる。「価値尺度」という言葉の正確な意義について混乱していたことから、スミスは、ここで、貨幣を労働と同等の地位に仕立てあげている、あるいはほとんどそのようにしている。というのは、彼は、さらに進んで、不変の価値をもちまたそれゆえ有効な測定物差しとして使用されうようなものをさがそうとしている、からである。ところで彼は、最も広く用いられている貨幣商品である金と銀とを、価値において、すなわち、それらを生産するのに必要な

労働の量において、あるいは、（これまた混乱であるが）それらの一定量が支配しうる労働の量において、変動をこうむるものとして、しりぞけている。こうして彼は労働に戻っていく。彼によれば、労働自体の価値はけっして変動することなく、それゆえ労働「だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準」(W. N., p. 33. 大河内訳<I>58ページ。)でありつづけるのである。かくして、労働は諸商品の真実価格 (real price) となり、貨幣は諸商品の名目価格 (nominal price) となる、とされるのである。(E. Roll, *ibid.*, pp. 159-160. 邦訳<上>203-204ページ。)

またロールは、スミスの議論では労働の量（商品の生産に要する労働の量、商品に体化されている労働の量）と労働の価値（一定量の労働で購買しうる商品の量、あるいは、一定量の商品で購買しうる労働の量）との混同が貫徹されている、とするのであるが、他方、ロールは、そこに一つの難点があるということにはスミス自身も気づいていたらしい、とし、そしてその根拠として、スミスは、労働の価値（これをスミスは不変と考えたばかりである）は、労働者にとってはつねに一定であるけれども、それを買う人にとっては、あるときにはヨリ多量の、あるときにはヨリ少量の財貨で、同量の労働を購買できるがゆえに、変動するかのようにみえるということを認めている、ということあげている。ただしロールによれば、スミスは、安かったり高かったりするの、労働ではなくて、労働を買う財貨のほうであると述べることによって、その問題を回避してしまい、そして「真実」価格と「名目」価格という語に、前とは別の意味づけを与えている、すなわち、前者は生活の必需品と便益品の量、後者は労働をも含めたすべてのものと交換に与えられる貨幣量としている、とされる。(E. Roll, *ibid.*, p. 160. 邦訳<上>204-205ページ。)

23) E. Roll, *ibid.*, pp. 161-163. 邦訳<上>205-208ページ。

(4) V.W.ブレイドゥン (1938)

他方、ブレイドゥンは1938年の論文において、多くの場合「スミスの価値尺度論」の中心的な章とみられている『国富論』第1篇第5章は、本質的には、第1章から第3章の分業論で展開されている生産理論のつづきであるという見方を、示している。すなわち、ブレイドゥンによれば、第4章の末尾における価値問題に対する論究計画についてのスミスの言葉をその言葉どおりに受け取れば、第5章は交換価値についての所論の一部分ということになる。だが、第11章の諸部分とともに第5章を研究すれば、それが全く別の事柄を取り扱っていることがわかる。そこには二つの目的が

あるのであって、一つは、貨幣のバールを、人々は働きそして他人の所産を支配しているという実質的なプロセスにまで、引きおろすこと、もう一つは、財貨の生産の難易の尺度、生産効率の变化の尺度、「実質費用」^{リアル・コスト}の変化の尺度を、見出すことである、とされるのである。そしてブレイドゥンは、スミスは第5章において「真実価格」^{リアル・プライス²⁴⁾}の理論を展開することによってこれらの目的を達成しようとし、そしてこの理論を第11章で使用したのであり、この意味で、『国富論』第1篇第5章は、事物の「真実価格」を議論し、そしてそれは、第1篇第1章から第3章の分業論で展開された生産理論のつづきであり、それは「労働の生産諸力における改善」ということとかわり合うものである、とするのである。²⁵⁾

そこで、つぎの〈補記〉において、ブレイドゥンによる「スミスの真実価格の理論」についての説明の要旨を示しておくこととする。

〈補 記〉

ブレイドゥンは、「真実価格」についてのスミスの議論を、大旨、以下のようなものとして示している。それによれば、『国富論』第1篇第5章では、スミスは、(交換)価値ではなく「真実価格」を議論していたのであり、事物一般および特定の事物がヨリ容易に獲得することができるようになっているかという歴史的な問題を取り扱っていたのであった。スミスは、事物の「真実価格」を、「それを獲得するための労苦と骨折り」と定義する。そしてスミスは、この「真実価格」の考察において、財貨を獲得することの難易の程度の検査手段として、不変の不効用を伴うものとしての労働の、継続期間を、弁護する。ところで、全体としての社会の観点からすれば、あるいは、なんらかの孤立した自給自足的な小自作農の観点からすれば、このような「それを獲得するための労苦と骨折り」としての事物の「真実価格」という概念は、簡単でかつ合理的な概念である。しかしながら、その概念を、分業が大いに進展しそしてほとんどの生産が販売のためであって直接的な使用のためでないといった社会での諸個人に適用す

ることには、困難が存在する。そこでスミスは「労働支配力」(“labour command”)に関心を向けるのであるが、そのさいスミスは、事物の「真実価格」とその「労働支配力」とのあいだの通常の関係ということについては、なんらかの注意をもって検討してはいない。しかしながら、スミスは、諸商品の「真実価格」における²⁶⁾変化は同一方向でのまたおおよそ同一の大きさでの、それらの諸商品の「労働支配力」における²⁷⁾変化を産み出すということを、想定していた。また、なんらかの一つの商品を生産するさいにおける効率の改善は、その商品を自分自身の肉体の労苦によって直接的に購買する人々にとってだけでなく、その商品を貨幣で購買する人々にとっても、その商品を安価にするであろうということを、想定していた。さらにまたこの結果が到達されるメカニズム（すなわち、「獲得することが」ヨリ容易な品物は、ヨリ豊富になるであろう、そして、もし需要が同じほどの速さで増加しないならば、価格は低下する、というメカニズム）をスミスは理解していた。ところで、スミスはこの「真実価格」の議論において、長期間にわたっての、(生産・獲得に伴う労苦と骨折りとしての)「実質費用」の変動(したがって、生産効率の変動、生産の難易度の変動→真実価格の変動)に関心を抱いていたのであった。しかしながら、あらゆる商品の生産に伴う「労苦と骨折り」の量を²⁸⁾直接的に測定することの困難性に直面して、スミスは、長期間にわたって不変の「真実価格」を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたか、あるいはそれら両方の要件をそなえてきた商品を、²⁹⁾捜し求めた。〔すなわち、長期間にわたって不変の真実価格を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたか、あるいはそれら両方の要件をそなえてきた商品によって、長期間にわたっての他の商品の実質費用の変化(他の商品の真実価格の変化——支配しうる労働量の変化がそれにおおよそ対応する——)を、測定しようとした。〕そしてスミスは、そのような商品として、銀を²⁷⁾却下し、²⁸⁾穀物を、²⁹⁾経験的根拠から、また、二つの理論的根拠から、³⁰⁾選んだのであった。

- 24) なお、ブレイドゥンによれば、スミスは「価値」という用語を多数の意味で使用し、ときとしてこの「真実価格」をあらわすためにも使用しているのであるが、スミスの議論においては、「真実価格」は「交換価値」あるいはたんに「価値」とは別個の概念である、とされる。このことについての1938年の論文におけるブレイドゥンの説明については、V. W. Bladen, 'Adam Smith on Value' in *Essays in Political Economy in Honour of E. J. Urwick*, ed. by H. A. Innis, Univ. of Toronto Press, 1938, pp. 30 ff を見よ。
- 25) V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 28-29, 30 ff.
- 26) なお、ブレイドゥンは、スミスは以上のような脈絡のなかで、人々は働きそして他人の所産を支配しているというプロセスとしての実質的な経済プロセスにまで貨幣のペールを引きおろすという第5章での彼の目的を遂行しようとしている、とみているようである。
- 27) ブレイドゥンは、スミスがそうしたことの理由を示すものとして、「それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、……それらの金属類が購買または支配できた労働もいっそう少なくなった」(W. N., p. 32. 大河内訳<I>57ページ。)というスミスの文章を引用している。V. W. Bladen, *ibid.*, p. 36.
- 28) ブレイドゥンは、スミスのあげる経験的根拠を示すものとして、「穀物で納めることになっている地代は、貨幣で納めることになっている地代にくらべて、その価値をはるかによく保持してきた」(W. N., p. 34. 大河内訳<I>60ページ。)というスミスのことばを引用している。V. W. Bladen, *ibid.*, p. 36.
- また、ブレイドゥンは、このようなスミスの議論に関連して、1908年のH. J. ダavenportの研究(H. J. Davenport, *Value and Distribution*<Univ. of Chicago Press, 1908>, chap. xiii) およびC. M. ウォールシュの諸著作(とくに、C. M. Walsh, *The Fundamental Problem in Monetary Science*<Macmillan, 1903>)を参照するよう指示するのであるが、それに関連して、彼は、マーシャルのつぎのような文章を示している。「私は、言われたことをしばしば理解することができなかった。というのは、金の騰貴が一般的な(金)価格の低下と対比されたときに、言葉がどのように使用されているのかということを理解できなかったからである。それゆえ、私の立場を明らかにするために、私はつぎのことを言いたい。つまり、それが、そのように対比され、そして、金の真実価値の上昇を示すものとして使用されるときには、私はそれを、あらゆる種類の労働にたいして金をもつ購買力の増加によって測定されるものとみなす、ということである。」(*Official Papers by Alfred Marshall*, ed. by J. M. Keynes<Macmillan, 1926>, pp. 32-33.) V. W. Bladen, *ibid.*, p. 36 n. 16.
- 29) ブレイドゥンは、スミスの示している第一の理論的根拠は、「労働者の生活資料」

である穀物を所有する人は労働を支配するということである、として、つぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、遠くへだたった時点では等量の穀物のほうが、同一の真実価値に近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量に近いものを購買または支配することができる。ここでことわっておくが、穀物の等量のほうが、他のどんな商品の等量よりもいっそうこの任務を果しやすいというだけのことである。穀物の等量ですらも、この任務を正確に果すものではないからである。労働者の生活資料は……場合によって非常に異なることがある。」(W.N., p. 35. 大河内訳< I >61ページ。)
V. W. Bladen, *ibid.*, p. 36.

また、ブレイドゥンは、スミスが穀物を選んだことの第二の理論的根拠は、18世紀の農業革命にもかかわらず、穀物の「真実価格」は長期にわたって安定的であったということであった、とする。なお、ブレイドゥンは、そのことをあらわす例として、のちの第1篇第11章の「余論」でスミスが示しているつぎのような文章を引用している。「そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にはほぼ同量の労働を必要とするであろう……。というのは、耕作が進歩しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、われわれは、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表するであろう……ということを安んじて確信してよいだろう。」(W.N., p. 187. 大河内訳< I >309ページ。)
V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 36-37.

なお、ブレイドゥンによれば、変動する真実価格の尺度として穀物をスミスが選んだことにたいするこれらの理論的な根拠は非常に薄弱なものであるとされ、そしてさらに、たぶん真にやっかいなことは、真実価格の尺度といったものは存在しないということである、とされる。V. W. Bladen, *ibid.*, p. 37.

- 30) V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 30-37. また、ブレイドゥンは、スミスは主旨以上のような形で『国富論』第1篇第5章において「真実価格」の理論を概説し、そしてそれを第11章で使用した、とみるのであるが、ブレイドゥンは、第11章の大きな部分を占める「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」では、価値という言葉が「真実価格」と同じものとして使用され、そして、銀の「穀物」価格での変化が、その「真実価格」における変化を測定するものとして考えられている、として、ここでのスミスの議論を検討している。また、ブレイドゥンは、スミスは真実価格の変化に関心を抱いていたのであるが、異なる諸商品のあいだでの真実価格の諸変化における相違は、これら諸商品の、諸交換価値の階層関係における位置の諸変化を引き起こすということから、この「余論」での銀あるいは畜牛の真実価格についてのスミスの議論は、このような意味でなぜある諸価値が変化してきたのか

という変化する諸価値についての研究を構成するとし、それに関連するスミスの議論を検討している。（ブレイドゥンは、以上のような形でスミスは第5章において「真実価格」の理論を概説し第11章でそれを使用したのだ、とみるのである。）
V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 37-40.

結びに代えて

以上、1930年代に海外において発表された「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究のいくつかをみてきた。

以下では、それらの研究の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まずローゼンベルグの研究に特徴的な点の一つは、「価値尺度」という言葉には、価値の実体をなし・価値を規制し・価値を内面的に較量しうる尺度といった意味での価値の「内面的」尺度と、たとえば貨幣が価値の尺度であるという意味での価値の「外面的」尺度という、二つの意味合いがあるという認識にもとづいて、スミスの議論を検討していることである。そしてローゼンベルグによれば、スミスはまず、彼の研究対象としての「交換価値」の尺度を労働に求めるのであるが、そのさいスミスは価値の内面的尺度と外面的尺度とを区別せずに混同しており、それに対応して、スミスの議論には、「生きた労働」と「対象化された労働」、「購買されうる労働」と「支出された労働」との混同、同一視がみられる、とされるのであった。さらにまたローゼンベルグによれば、スミスは他方で、労働が諸商品の交換価値を規制する内面的尺度であるとともにその外面的尺度でもあるのは資本および土地私有のまだ存在しなかった「原始状態」においてのみであると考えざるをえなかったものであり、それらが存在する社会については、内面的尺度を労働にではなく収入→生産費に求めつつも、それでもなお外面的尺度を労働に求めようとしているのであるが、労働が価値の内面的尺度でなくなったとすれば、もはやそれが外面的尺度であることを主張する根拠はないのであり、さらにまたスミスは、商品によって購買

されうる労働の量は、労賃の変動に応じて変化するため「購買されうる労働」はもはや価値の尺度ではありえないにもかかわらず、それを価値の尺度とするために、変化するのは商品の価値であって労働の価値ではないということを証明しようとし、そしてその証明において彼は主観説におちいった、とされるのであった。

これにたいし、ボウレイは、1937年の著書においては、「価値尺度」についてのスミスの議論を、ローゼンベルグの用語でいえばどちらかといえば「価値の内面的尺度」についての議論としてではなく「価値の外面的尺度」についての議論としてとらえている、といえよう。すなわち、ボウレイは、価値尺度についてのスミスの議論を価値の原因、決定因についての議論としてではなく、穀物が一つの価値尺度であるといった次元での議論としてとらえるのであった。そしてボウレイは、スミスが価値の原因、決定因についての議論と価値尺度についての議論とのあいだで混乱していたわけではないとみるとともに、ボウレイはまた、スミスがこのような意味での不変の価値尺度を追求したのはたんに個々の財貨の価値を測定するものとしての価値尺度それ自体を見出すためであっただけでなく、さらにそれによって、総国富およびその変化を測定するための標準を見出すためであったのであり、そしてその標準をスミスは労働（「支配される労働」）さらに穀物に求めた、とするのであった。また、価値尺度としての「支配される労働」というスミスの考えは労働によって引きおこされる犠牲の不変性ということについてのスミスの主張と矛盾するものではなかった、とされるのであった。

他方ロールは、ローゼンベルグと類似した視点からスミスの議論をみるのであった。すなわちロールによれば、スミスは、交換価値の起源、規制を説明し交換価値に固有のものといった意味での価値尺度と、貨幣と同等の地位にある尺度、それでもって諸商品の価値を比較する物差しといった意味での価値尺度というこれら二つの価値尺度の意味の相違を認識せず、「価値尺度」という言葉の正確な意義について混乱していた、とされるの

であった。そしてまたロールによれば、スミスは価値尺度の二つの意義のいずれの脈絡においても真の尺度を労働に求めようとしたのであるが、同時にいずれの脈絡においても、「商品の生産に要する労働の量」と「商品で購買しうる労働の量」とを混同したのであり、また、この二つの労働量についての混乱のゆえにスミスは、資本主義的生産の諸条件のもとにある社会に関しては、価値の唯一の源泉、固有の尺度を労働に求めることが困難となり、「生産に要する労働の量」による交換価値の規制の妥当性を「初期未開の社会状態」に限定せざるをえなくなり、前者の社会については、そこでも価格の各構成部分の真実価値はそれが支配しうる労働量に等しいと主張しはするのであるが、事実上、初期的な生産費説を提示することとなった、とされるのであった。

最後に、ブレイドゥンは、1938年の論文においては、多くの場合「スミスの価値尺度論」の中心的な章とみられている『国富論』第1篇第5章でのスミスの議論を交換価値についての議論とみずに、そこでのスミスの目的は、貨幣のペールを、人々は働きそして他人の所産を支配しているという実質的なプロセスにまで引きおろすこと、さらに、財貨の生産の難易の尺度、生産効率の変化の尺度、「実質費用」の変化の尺度を見出すこと、にあったのであり、この意味で第5章は、第1章から第3章の分業論で展開されている生産理論のつづきであり、そしてスミスは「真実価格」の理論を展開することによってこれらの目的を達成しようとしたのである、とするのであった。すなわち、ブレイドゥンによれば、スミスは、事物の「真実価格」を「それを獲得するための労苦と骨折り」と定義し、その「真実価格」の大きさの尺度として不変の不効用を伴うものとしての労働の継続期間(生産、獲得に必要な労働の量)を弁護する、他方、スミスは、このような意味での事物の「真実価格」の変化は、その変化と同一方向でのまたおおよそ同一の大きさでのその事物の「労働支配力」の変化を産み出すと考えた(以上のような脈絡のなかで、スミスは、人々は働きそして他人の所産を支配しているというプロセスとしての実質的な経済プロセス

についての彼の見方を示す。),そしてさらにスミスは、あらゆる財貨の生産,獲得に伴う「労苦と骨折り」の量を直接的に測定するということの困難性を克服して諸財貨の真実価格の変化——それらの諸財貨が支配しうる労働量の変化が,それらの諸財貨の真実価格の変化に,おおよそ対応する——を測定するためには,不変の真実価格を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたかあるいはそれら両方の要件をそなえてきた財貨でもって,他の諸財貨の真実価格の変化を測定することが必要であると考え,そしてそのような財貨として長期間については銀ではなく穀物を選んだ(スミスは,以上のような形で,事実上,財貨の生産の難易の尺度,生産効率の変化の尺度,「実質費用」の変化の尺度を見出そうという試みをなした。),そしてさらにまたスミスは第5章において展開したこの真実価格の理論を第1篇第11章で使用したのである,とされるのであった。